

勝負のしどころ

学校長 鈴木 盛久

いよいよ4月から、小・中学校において新指導要領が実施される。それにむけて、依然として危惧されることがいくつかある。一つには、授業時数が削減され、内容も高学年や上位校へ移行するという形で現行よりは薄くなるとして、学力低下につながらないかという問題である。これに対して、文部科学省は、学習指導要領は超えてはならないハードルであるという従来の見解から、学習目標の最低基準であると軌道修正をした。しかしながら、4月から登場する教科書は従来の見解をもとに検定を通過したものであり、学習内容の見直し・補充は、各学校、各教師の努力・工夫に委ねられるところが大きい。二つ目は、今回の指導要領の改訂で一層強調された、いわゆる生きる力をどう育成するかという問題である。新設される総合的な学習はもとより、各教科、各領域の学習においても最終的に目指すところは、当然同じでなくてはならない。各学校で、カリキュラムや学習の枠組みにおいて統一性のある学校プラン創造の必要性が叫ばれる所以がそこにある。こうしてみると、今後、学校あるいは教師の役割が益々大きくなっていくと考えられる。

このような新指導要領の基本理念は、20世紀型の教師主導の学習観から、学習者主体の学習観への転換、すなわち、学び方を学ぶことにより、次第に学ぶこと自体を面白く感じ、生涯学習へとつなげる、という図式になろう。

学ぶことが面白いと気付かせるにはどうすればいいのか、これは古くて新しい問題である。誰だって、「強いられて勉める」のは苦痛である。しかし、そのような苦痛のなかで、何かみつけ、そういうことだったのかとか、ではあれはこう考えるとつじつまが合うのではないか、という形で学習者の眼から鱗を何枚落とさせるか、それが私たち教師の勝負のしどころの一つではないだろうか。眼から鱗が落ちる前提として、あらかじめ心にひっかかる疑問をできるだけ蓄積させておくことも必要条件となる。

私は、大学で、地学教育内容の授業を担当しているが、学生達の学びの姿を通して、以下のようなことを感じている。中学校以来、地学内容の学習はしたことがない、といった学生が9割以上いる中で、様々な地学事象の学習を通して、自然の営為が、いかに神秘的で、人知を超えた不思議さ、美しさに満ち満ちているか、などいくら教室で説いても、学習者の真の財産にはなっていない。そこに思いが至るのはやはり3年生になってからである。授業を通して、地学事象の基礎基本を学び、実際に野外に出て実習、体験を重ねるうちに、試行錯誤を繰り返しながら、見方を体で覚え、観察の視点が定まってくると、次第に「石が語りかけてくれる」というような、いわば非科学的な感想が増えてくる。そうして、あーそうだったのかと歓声をあげ、納得顔になっていく。彼ら・彼女らは、卒論を始めるころになると、故郷に帰ってもまわりの風景が違って見えてきた、と嬉しそうに話してくれるのである。まさに目から鱗が落ちたのである。こうして、学生達は、学習の喜び・楽しさを自分たちで実感し体得していくのであろう。このような道筋をきちんとリードできるかどうか、が私の勝負のしどころと思っている。

本紀要の研究同人は、日頃から各教科・各領域の学習さらに総合的な学習を通して、子どもたちの自立と育ちを願い、上述のような勝負のしどころを意識しつつ、ささやかながら努力を積み重ねているつもりである。皆様のご批評・ご助言を賜るよう心よりお願いする次第である。